

# 自民党は潔く解党すべし

衆議院議員

城内実

「カイカク利権」を粉碎せよ

—— 自民党が大敗し、再建を模索している最中だ。かつて自民党に籍を置いたものの、郵政民営化に反対票を投じて離党した身として、今の自民党をどのように見ているか。

城内 今回の事態は、四年前の郵政選挙の結果が出た時点で、予見されたことだ。衆議院選挙を郵政民営化に賛成か、反対かという単純なマルバツ選挙にしてしまい、さらに郵政民営



城内実 (きうち・みのる)

昭和40年生まれ。東京大学教養部卒業後、外務省に入省。その後、駐米大使館勤務を経て、平成15年衆議院議員に当選。平成17年、郵政民営化に反対し、平成21年、再出馬し当選を果した。

化をすればあたかもすべての問題が解決する、全員が幸せになれるという詐欺まがいの選挙戦を行った。その結果得た三分の二という議席に驕り昂ぶり、責任政党としての態をなさなくなってしまった。本来、二年前の参議院選挙での敗北を機に真の国民政党、保守政党としてどうあるべきか、立て直しを図るチャンスもあったはずだが、些細な政争に奔走してしまった。

—— 中川昭一元財務大臣が急死されたが、自民党内部でも真正保守派の次代の指導者と目されていた中川氏の死は象徴的な出来事にも思える。

城内 中川昭一先生のご冥福をお祈りする。中川先生は、平沼赳夫先生、安倍晋三先生と並んで、真の日本の独立自尊の達成に力を尽くされた方だった。だが、平沼先生は自民党を追い出され、安倍先生は諸般の事情で政権を投げ出さざるを得ず、そして今、中川先生も亡くなられた。果た

してこれから保守政党として自民党は再生できるのか、なかなか大変だと思う。

一連の自民党の混乱の起因には、やはり郵政民営化の問題がある。もっと本質的な点を言えば、郵政民営化に代表される、小泉・竹中構造改革路線、いわゆる新自由主義路線の問題がある。保守政党である自民党と新自由主義というのは本質的に共存できないのだ。ところがそれを無理にやってみてしま、自民党にひずみができた。まず、平沼先生を初めとする真正保守グループがこのことに気がつき、国益擁護の観点から郵政売国法案に反対した。これに対して小泉元首相は刺客すなわち小泉・竹中路線の忠実な支持者を送り込み、多くの保守政治家を政界から放逐した。小泉元首相の後を継いだ安倍元首相は本来の自民党の姿に戻そうとし、それなりの実績も挙げているのだが、最重要課題である小泉・竹中路線との決別については、なにしろ党内の最大勢力が小泉・竹中路線の支持者であったため、達成できなかった。いわば、新自由主義と自らの保守政治の理念との間で引き裂かれてしまったのだ。

—— 新自由主義と保守が相容れないとはどういうことか。

城内 新自由主義とは、規制を緩和して市場に任せ、金儲け競争を放置するという発想だ。もちろん、金儲けが一律に悪いわけではない。社会には一定程度、金儲けに情熱を見出し奔走する人がいるのは事実だし、そういう情熱が経済を牽引

する動力の一つである事は間違いない。しかし、金儲けが社会の単一の至上価値になってしまふのは駄目なのだ。日本の共存共栄型の国柄とどうしても合わない。小泉・竹中路線とは、まさに、日本社会の価値観をただ金だけにしてしまふ「カイカク」だった。

その象徴である郵政民営化とは結局なんだったのか。私の定義では、郵政民営化とは、「すべての国民の幸せのために使うべき貴重な金融資産等を外国のハゲタカ金融資本家およびその手先の日本人にタダ同然の値段で払い下げること」にほかならない。

前政権末期、鳩山邦夫元総務大臣のときに大きく問題となつた「かんぽの宿売却問題」に明らかだが、郵政民営化に名を借りて、「かんぽの宿」という国民の資産をハゲタカの手先である私企業に格安で払い下げようとしていたのだ。これが郵政民営化の実態だ。私はこのような、経済戦略会議の委員として新自由主義政策を推進しつつ、そこに自分の利権を確保しようとする人々を「カイカク利権」として批判してきた。労働者派遣業の自由化を推進し、派遣業大手の会長に就任した人物などその代表だ。

先日、亀井金融・郵政担当大臣が「家族間で殺人が増えたのは、経団連の責任だ」という趣旨の発言をされたが、これは金だけが唯一の価値である社会、簡単に労働者のクビを切つてもなんとも思わない殺伐とした社会を生み出したことへ

の批判だろう。新自由主義を推進すれば、金以外の価値は破壊されていくのだ。

だが、まさに金以外の価値こそ、保守政治家が守るべきものだ。それは共存共栄の社会であり、地域共同体という連帯感であり、家族を大事にする心だ。

保守政党である自民党が、自分たちが守るべきものを破壊する新自由主義の旗を掲げた時点で、自民党の崩壊は運命付けられたのだ。

**自民党は「解党的」出直しではなく、解党せよ！**

—— 今、自民党は「解党的出直し」と言っている。

城内 「的」などと言っているから駄目なのだ。今でも自民党内部には小泉・竹中路線の信奉者がたくさんいる。そういう人がいる限り、保守政党でありながら新自由主義の旗を振ってしまったという反省がない限り、自民党の再生はありえない。おそらく来年の参議院選挙でも惨敗するだろう。

自民党という政党は近年、与党で居続けることだけが存在理由の政党になっていた。とにかく与党であれば、派閥レンデール順送りでなんとなく役職が回ってきて、当然そこには利権もある。だから、意見の不一致も恩讐も乗り越えて、ただただ与党であり続けるためだけに結束を維持してきた。

だが、新自由主義政策に転じた、すなわち経団連迎合型の政策運営に転じたことで、日本医師会、日歯連、建設業界、

郵便局長会、高齢者といった、従来自民党を応援してきた人々をすべて敵に回してしまった。その結果野党に転落したのだが、野党である自民党にもはや存在意義はないのだ。

来年の夏には参議院選挙があるが、ここでも自民党は負けるだろう。これまで、小選挙区の衆議院議員が地元の後援会を動かして参議院議員候補を応援するというのが自民党の戦術だった。ところが今回、その肝心の衆議院議員が激減してしまい、参議院選挙の応援も手薄にならざるをえない。民主党も本格的にトドメを刺しにくる。

自民党は「解党的」ではなく、解党すればよい。そして小泉・竹中の追従者は新たに「新自由主義党」でも結党して、正直に自分たちの作りたい社会、金だけが至上価値である弱者切捨て社会の実現を世論に訴えて選挙を戦うことだ。その一方で、日本の社会、金以外の価値を大事にする政治家たちが本当の保守政党を立ち上げればよいのだ。だが自民党にはそんな勇氣はないだろうから、日本の保守再建には少なくともあと十年はかかるだろう。それほど、保守派が受けたダメージは大きい。

—— 城内氏が自民党に戻る、あるいは保守再編をよびかけることはありうるか。

城内 現時点で平沼グループが自民党に戻ることはありえない。なにしろ、あれだけのことを自民党にはされたのだ。自民党も胸に手を当ててよく考えれば、我々に復党を呼びかけ

ることなどできないはずだ。

私は無所属であり、それなりのハンデもあるが、民主党、自民党それぞれに言うべきことを言える立場でもある。「平沼グループ」の三人で「国益と国民の生活を守る会（国守の会）」という無所属の会派をつくったが、これを政党として立ち上げないのは、政治が既存の発想、枠組みではもう通じない状況になっているからだ。ただし、無所属の強みをいかして、政党に関係なく色々声を掛け、将来の政界再編に向けて、党派を超えた連携を模索することはありうるだろう。

—— 新自由主義は正面玄関から自民党の中に入ってきたというより、裏口からこっそりと忍び込んで自民党を自壊させたように思える。自民党にとって今回の選挙の真の敵は、内部に入り込んだ新自由主義者だったのに、民主党という張子の虎を敵と見誤って自滅したという印象だ。

**城内** 強い敵よりも愚かな味方のほうが致命的だ、という見本だ。問題は、そういう本質的な敵の侵入を見破れなかった、保守派自体の劣化がある。これが保守政党再建にはあと十年はかかるというもう一つの理由だ。

いま、保守陣営はきわめてイデオロギー化、教条化しつつある。あまり言いたくはないが、「美しい国」「保守再生」というような抽象的な理念だけが先行して硬直化してしまい、地に足が着いていない、具象なき抽象概念の弄びに堕してしまっている。たとえば、私が左翼雑誌である『週刊金曜日』

主宰のトークショーに出演するだけで、「城内は左翼に転向した」などという非難が寄せられる。

だが、このような「あいつは誰々と会ったから、あんな場所にいたから我々を裏切ったに違いない」という発想こそ、全共闘末期の内ゲバの論理ではないか。『週刊金曜日』の読者も、私と方向性は違うかもしれないが、真剣に日本のことを考えている。真剣に日本のことを考えている人々から、立場を越えて意見を聞きたいと声を掛けられれば、行くのは当たり前のことだ。それを思想性向が違うから、と門前払いするのは、むしろ知的不誠実だ。

大事なのは、自らを定義づけて、自分の手足を縛るようなことはしないことだ。私は世間から「保守だ」と言われているので、そういうものかと思って便宜的に「保守」という言葉を使うこともあるが、自らに対して「保守はかくあるべし」というカント的定言命令を抱いたことはない。

国旗・国歌を大事にすればすなわち保守、ということではない。国旗・国歌という表象そのものではなく、国旗・国歌によって指し示されているものが大事なのだ。すなわち、命、先祖への崇敬、家族そして郷土への愛情、自然への畏怖、その延長線上に皇室があり、国旗・国歌がある。

むろん、私も偉そうに言えた立場ではなく、これは四年間、選挙活動をする中で肌身にしみて感じられてわかったことだ。

## 「コンクリート保守」を脱却せよ

—— 選挙といえば、城内氏は四年前の郵政選挙で、片平なぎさに似た名前の刺客を立てられ、わずか700票あまりの差で落選の憂き目にあわれた。しかし、その後の四年間、毎日の辻立ちはもちろん、山奥の一軒しかないような場所までくまなく歩き回ったと聞いている。その結果、今回は百倍返して、7万票の差で雪辱を晴らされた。

**城内** 今回のような、自民党対民主党という大きな流れの中で無所属で埋没せずに勝ち上がるのは、大変ではなかったと言えは嘘になる。だが、選挙前に平沼先生を中心に新党を立ち上げるといふ動きに対して、私は反対した。新党を立ち上げて、小選挙区で負けても比例で復活を、という逃げ道のある戦いをしたくなかった。

選挙というのは不思議なものだと思う。特に私は無所属だから、今回大きな風が吹いた民主党議員とは状況が違う。つまり、「今回は自民党じゃなくて民主党に投票しよう」と思っている人がいたとしても、党単位で判断しているから、投票所で初めて民主党候補者の名前を認識するというようなことが多々あったはずだ。ところが私は無所属だ。無所属というのは「どこの馬の骨かもわからない」というのとほとんど同義だ。それを乗り越えるためには、「城内実」という名前を投票用紙に書いてもらうために、選挙区の皆さんに自分がどういふ政治をしたいのか、どういふ社会を作りたいのかを、

力を尽くして説明しなければならぬ。

私の選挙区で、山奥で一軒だけある家があった。私はそこまで、半日掛けて、自動車を乗り継いだ後、徒歩で訪れた。そこには二人しか住んでいないから、たった二票だ。だが、二票だから切り捨ててよい、もっと人が集まっていって効率の良い住宅地を回るほうがよいと考えるのは新自由主義的間違いだ。一票一票には、さまざまな人生を送っている人々が政治に懸ける期待、希望、願いが詰まっている。それを実現するために死力を尽くすのが政治家であり、そのためにはこちらが訴えるだけでなく、声を聞かなければならないはずだ。

—— 「選挙道」ともいふべき境地に達しているように見受けられます。

**城内** 確かに、「道」といふような感覚はある。例えば、一軒一軒回っているとき、ここには今、人がいる、ここは留守だ、ということは一瞬時にわかるようになってくる。空き巣に転職できるのではないかと思うほど、人のぬくもりに対して敏感になる。また、留守のお宅を訪れたときに、一筆書いた名刺をどこにどのように置けば読んでくれるかも学んだ。あるいは、三十軒ほどの集落を回る際にも、どの家から挨拶に伺えばよいかという、選挙区のツボというものも皮膚感覚でわかるようになってくる。

それらは実際的な話だが、直接票には関係ないが大事なこともある。移動中に鎮守の森や、社があれば、かならずお参

りした。その土地を守ってきた神様にご挨拶せずに通り過ぎることはできないからだ。そして、その土地への敬意を感じることが、選挙で一番大事なことなのだと思う。

さきほどの保守のイデオロギー化とも通じるのだが、本来、保守というものはこうした大地に根ざした感覚の中から出てくるものだ。知識、知性のほかに、土地に対する霊性、あるいは感性というものが必要だ。この感覚がないところで天下国家を語っても駄目なのだ。郷土への感覚なき保守派を、わたしはコンクリート保守と呼んでいる。コンクリートのような無機質な、あたたかみのない保守派という意味だ。保守派の再建のためには、コンクリート保守からまず脱しなければならぬ。それには、まず自分の選挙区を、どんな山の中でも回り、生活の息吹を肌で感ずることだ。

とはいえ、「選挙道」があるとすれば、まだ私は初段くらいだ。もつと地元に着しつつ、日本国家全体のことでも訴求できる政治家になれるかという試金石が、次の衆議院選挙だ。

—— 鳩山内閣が発足して約一ヶ月だ。民主党の政策をどのように見ているか。

**城内** 期待もあるが、危うさも感じている。民主党の目玉として国家戦略局があるが、これは戦前、非常事態下の企画院とよく似た発想に基づいている。戦前にはこの企画院が実際には官僚の権力を強化させることになった。いわば、民主党の発想はファシズムの扉を開きかねないのだ。

また、政治主導をうたってはいるが、それが党職員の権限強化につながっている。そうになると、党職員は党のために仕事をやるわけだから、国民ではなく党を向いた政治になりかねない。結局、ナチスや共産主義国家のような、党の権力が異常に肥大した政治体制になることを懸念している。

だがその一方で、いまのところ心配されたような極端な左傾政策も行っていない。文部科学行政でも日教組の力が強くなる心配されたが、現段階ではそれも杞憂のようだ。組閣にしても、保守政治家の重鎮である亀井静香氏を金融・郵政担当大臣に登用するなどバランスが取れており、自民党政治の膿を出そうとしている。このあたりには期待を持っている。

—— 亀井大臣は金融モラトリアム法案を提出したが、財界からは反発の声も出ている。

**城内** 亀井氏には賛成だ。中小企業こそが日本経済の中心だ。そこを救済するための政策であり、これによって中小企業が回復し、経済が回復すれば、その恩恵を金融業界も受けることになる。短期ではなく長期的視野で判断すべきだ。

—— 城内氏はかつて外務官僚であったが、鈴木宗男氏の外務委員長就任はどのようにみているか。

**城内** 淡々と、闇の部分を持ち出すべきだろう。先日、外務省を訪れたところ、全体の空気が重苦しく、暗い感じになっていた。元同僚としてはどうしても同情の思いも抱いてしまいが、自民党時代の膿はしっかりと出していたきたい。